

進振り制度の陰日向！後編 (教育コラム)

後編は影の部分についてですが、日向があれば陰があるという話であり、あまりネガティブな部分が強調されるとよくないので、いくつかの項目に分けてさらっとお伝え出来ればと思います。

では、早速 1 つ目といきたいところですが、皆さんにも少し学生時代というか青春時代というか、要するに子どもだった頃を思い出してもらいたいので、私が高校生の時にどうやって進学先を決めたのかをお伝えしたいと思います。皆さんもその頃の感情を思い出しながら読み進めてください。

以前のコラムにも書きましたが、日本一の田舎（鳥取県倉吉市）育ちの私はラグビー部がある普通科高校ということで、地元の所謂進学校に進みました。父の影響で小学 2 年からやっていたラグビー、中学はラグビー部が無かったので 3 年間陸上部でしたが、高校になったらラグビーをしたいという思いと、将来の進路を考えたこともなかった当時、特別専門的なことを学ぶ工業高校や農業高校ではなく、普通の学校という無知で勘違いし

た思いで決めた普通科高校でした。そんな感じなので、高校1年生の恐らく1学期だったと思いますが、進路希望調査のような用紙を記入する際に、自分が進学したい大学を書く訳ですが、中学校の陸上部の先生が卒業したと言っていた、地元鳥取大学と無知で勘違いしたままの私でも何故か名前だけは知っていた東京大学の2校を記入しました。2校の違いは所在地が違うだけといった認識だったので、担任の先生から「本当はどっちに行きたいの？」と聞かれた時に、都会への憧れから東京大学と純粹に答え、先生からは何故か褒められました。そんな高校生活のスタートでしたが、なんだかんだ色々な経験をし、3年生になった頃には具体的な大学や学部、もっといえば将来何をしたいか、どんな職業に就きたいかを決めなければいけない雰囲気や周りの環境もあり、無理やりこじつけて決めた大学・進学先というのが、大人になってから言える偽らざる正直な気持ちです。皆さんはどうでしたか？もちろん、私ほどいい加減な進路決定ではなかったと思いますが、明確な意思で将来を決めて進学された方もそれ程多くはないのかなと推測しています。

そんな私がもし仮に、当時「進振り制度」のある大学の存在を知っていて、仮に進学していた（出来ていた）としたら今からお伝えする陰の部分にどっぷりはまり、日本ではあまり採用されていないこのユニークな制度

を上手く利用することは出来なかったんだろうなと思っています。

と
ということで、お待たせしました 1 つ目、それは「受験は終わっていない」ということです。大学受験は多くの人にとって、それまでの人生の中での最も大きなインパクトのあるイベントだったと思います。かけてきた時間は膨大で、前編であげた進振り制度のある大学となると努力も相当なものになると思います。それほどの努力をしてやっと合格した大学、少しは気が抜けたり、また新天地での新生活という戸惑いもあり、今までのような張り詰めた生活ではなく、ゆっくりと少しずつ周りの環境に慣れながらの生活になるかもしれません。しかし、3 年生からの学部・学科を選択するにあたって、自身の希望する進路に進むためには成績上位者から選択権を持つことが出来る仕組みになっています。つまり、1 年生の春（spring）学期、通称 1S/semester はもちろん、1 年生の秋学期、1A/semester、2S/semester までの成績評価（近頃では欧米で使用される GPA）が影響してきます。大学受験で希望の大学に合格して入学後の約 1 年半、今度は学部・学科を決める受験をしているような期間になるという意味で「受験は終わっていない」と言えると思います。

次に2つ目、それは1つ目でもお分かりのように「自分の意思で学部・学科を選べない（かもしれない）」ということです。もちろん、大学に入学後も弛まぬ努力を続けて高いGPAを取れば、自分の希望する進路を選択できる可能性もありますが、精鋭ぞろいの中での競争になるので、大学受験よりレベルが高いかもしれません。本来大学生として、学業に専念するという事は全うですし、親の立場からすると当然のように感じてしまいますが、学業以外の体育会クラブ活動やサークル、今でもあるのか不明ですが合コンのような飲み会やアルバイトといった新しいことに挑戦することも大学進学のお楽しみです。しかし、あまりそちらに気を取られ過ぎると、進路決定に差しさわる可能性があることは明白です。事実、進振り制度のある大学で自身の希望する学部・学科に進めなかったという理由で退学する学生がそれなりにいるようです。

そして3つ目、それは学部・学科をまだ決めなくてよい、決められないといった「単なるモラトリアム期間になってしまう」ということです。先ほどからお伝えしているように、必死に勉強をして入学した大学、2年間の猶予期間と捉えて少しゆっくりしてしまうこともあるでしょう。モラ

トリアム期間を私は決して否定はしませんし、むしろ海外の高校生や大学生が卒業して次の進路や社会に出る前に経験する『ギャップイヤー』のような制度は、その後の人生の大きな糧になると思っています。ただ、日本の進振り制度のある大学の進振り期間を、それと同様に捉えてしまうと、その後の人生の選択肢を狭めてしまうこととなります。理由は今まで述べてきたように、成績（GPA）が全てだから。第二受験期と捉えるか、モトリアム期間と捉えるかで大きな差があるということです。

最後 4 つ目、それは「専門を学ぶ期間が短いのでは」ということです。進振り期間の 2 年間は全くの専門的な学びはないかといえ、そんなことはないのですが、所謂教養課程としての科目が多く充てられるため、本格的な専門分野を学ぶことが出来るのは学部・学科が決定した 3 年生からということになります。学部卒（学士・バチェラー）であれば僅か 2 年間になります。とは言え、前編で紹介した進振り制度のある大学の学生は大学院（修士・マスター）まで進む学生が比較的多く、一部は（博士・ドクター）まで進む学生もいるため、専門分野を学ぶ期間はそれなりに確保されていると思います。また、一般的な大学つまり学部・学科を決めて受験し入学する大学においても一般教養の必須科目はある程度あり、本格的

な専門の科目は2年間程はそれほど集中的に学ばず、3年生から所属するゼミ（ゼミナール）から学び4年生で卒業することを考えたら、それほど進振り制度のない大学と比べても、専門分野を学ぶ期間が極端に短い、半分の期間・2年間しかないといったデメリットはそんなにも大きくないと個人的には思いますが、参考までに。

結果、はじめからというか、大学受験までに自分の進みたい進路が明確にある人は、大学名や偏差値だけで大学受験をしてしまわない方が良いかと思います。大学入学がゴールではなく、そこからが本来**再スタート**だということを、少し先を経験している親として子どもの気持ち（自分が子どもだった頃の気持ちも思い出し）を考えてアドバイス出来ればいいのかなあと思う今日この頃です。とまあ、大学時代に学業を2の次3の次にして体育会ラグビー部やアルバイト、同級生との飲み会に夢中になっていた自分が言うなよと内心思っているのが、偽らざる事実です。

※なお、ダメダメな学生生活を送った私ですが、外国語大学出身として子どもには『卒業』は英語で『graduation』だけど、卒業は新たなスタートでもあるから『commencement』とも言うんだよ。だから、気を抜かずに新たな環境でも頑張ると伝えました。（汚名返上になってるのかな…???)

ソニー生命保険(株) 大分支社
〒 870-0029 大分市高砂町 2-50
オアシスひろば 21 9階
ライフプランナー 山田新悟